

# 平成 30 年度陸前高田市文化遺産調査 概要報告

次世代教員養成センター 北村恭康

## 1. 目的

2011年3月11日の東日本大震災及び大津波により、陸前高田市をはじめとする岩手・宮城・福島三県の太平洋岸は大きな被害を受けた。陸前高田市では市民の約1割にあたる人命が失われたほか、市庁舎を始め、博物館や図書館、文化ホール等の市の重要施設が被災した。多くのものを失ってしまった。しかし、幸いにも高台にあった寺の仏像は被災をまぬがれた。この仏像等の文化遺産を調査し、その価値を明確にすることが、陸前高田市や周辺市町村の市民を元気づけることになると考え、本調査団を派遣する。併せて被災地の状況を視察し、被災された方から聞き取りを行い、現地に学ぶ防災教育を開発する。

2. 日時 平成30年9月9日(日) ～ 12日(水)

3. 参加者 学部生 : 上田 薫、辰上亜弥子、仲村幸奈、櫛 乃里花、西村 奏  
大学院生 : 近藤花梨  
大学教員 : 山岸公基、北村恭康

4. 宿泊地 民宿吉田 (陸前高田市米崎町松峰 110-5)

## 5. 日程・活動

9月9日(日)

- ・仙台市博物館・仙台城見学 (仙台市青葉区川内 26)
- ・黒石寺 (奥州市水沢区黒石町字山内 17) 薬師如来坐像・僧形座像(伝慈覚大師座像)拝観

9月10日(月)

- ・陸前高田市教育委員会表敬訪問
- ・常膳寺 (陸前高田市小友町字上の坊) 千手観音菩薩立像調査
- ・広田半島周辺の津波関連石碑の探訪 6か所 黒崎神社前中吉丸の石碑見学

9月11日(火)

- ・長谷寺 (大船渡市猪川町字長谷堂 127) 十一面観音像調査
- ・吉浜の津波石探訪 (大船渡市三陸町吉浜)
- ・圓城寺 (陸前高田市矢作町愛宕下) 馬頭観音菩薩坐像調査
- ・津波の気仙川遡上ポイントの探訪 (陸前高田市横田町友沼)
- ・吉浜の津波石探訪 (大船渡市三陸町吉浜)
- ・震災当日気仙小学校勤務の教員に聞き取り調査 (教育委員会主任指導主事関戸文則先生)

9月12日(水)

- ・奥州市埋蔵文化センター見学 (奥州市水沢区佐倉河) ・中尊寺見学 (西磐井郡平泉町平泉衣関)
- ・無量光院跡見学 (西磐井郡平泉町花立) ・毛越寺見学 (西磐井郡平泉町字大沢)



黒石寺



常膳寺



長谷寺

## 6. ESD・防災教育における今回の調査目的について

今回の調査においては、大きく2つの目的があった。1つは、気仙川津波遡上ポイント・広田半島の津波関連石碑探訪(6か所)・一本松等、現地に立って、自分たちの五感を通して視ることである。2つめは、①震災時気仙小学校で担任をされていた先生から子どもたちを避難させるにあたって、マニュアルを超えることができたのか。②7年後でも必要とされるボランティアは何か。③今から思うと災害が起こる前、どう行動すべきだったのか。という3点の聞き取りである。

### (1)五感を通して視る

○広田半島の津波関連石碑探訪では、松阪泰盛氏の案内で7ヶ所を周ったが、工事のため6か所の石碑しか視ることができなかった。そこには、下図(1-1)のような文言が4面に記述されていた。

また、広田小学校の法面には同様の文意が石碑(1-2)に刻まれていた。建立が昭和9年3月となって



いるところから昭和8年の地震津波の教訓から建てられたものと思う。しかし、写真(1-3)を見てもらうとわかるように、石碑は階段の途中にあり、それより低い位置に今は住家がたっている。石碑の近くで今回の津波はどこまで来たのかを聞いてみると、石碑6本中2か所だけが、石碑より上までいったとのことであった。4本の石碑は、現在の住家より高所に立っていた。平坦部の少なさを考えれば仕方がないと思うところもあるが、昭和8年の地震津波、チリ地震津波から得られたものが、何十年という時間の流れの中で忘れ去られ「今回も大丈夫」という気持ちにさせていったのではないだろうか。ここだけのことではない。このような先人の思いが記されているものは、各地に残っているはずである。それらに目を止めどう行動するのかを考えなくては、いかなる自然災害に対して対応できなくなるのではないかと思う。前回の調査報告の中で、行政の取組として「空振り」を恐れず積極的に避難情報を伝えるとあったが、住民も「空振り」であったとしても、避難しないリスクを考えなくてはならない。また、津波の高さは伝えず、避難情報だけを伝える方法に変更しているともあったが、これも、津波の高さに惑わされることなく石碑にある「それ津浪機敏に高所へ」のとおり、住民がすぐに行動できるよう防災スキルの向上を図っていかうとする表れかもしれない。

○気仙川の津波遡上ポイントには今「東日本大震災津波到達点」という碑が立っている。(2-1)この場所は、後日グーグルマップで調べると気仙川河口から約7.6kmの地点であった。近くの農家の人に話を聞くと、自分のところでは被害がなかったが、右岸にあったプロイラーの養鶏場が被害にあったとのことであった。遡上する津波の強さは途中の鉄橋の破壊された姿を見たときに想像することができたが、さらに3kmほど遡上していったとは考えも及ばなかった。



2-1



防潮堤と一本松



吉浜の津波石

## (2)聞き取りより

### ①関戸文則氏(当時気仙小学校で5年生担任をされていた)

先生は、記憶があやふやのところもあるのですがと言いながら、当日の話をされた。その一部を掲載する。

第二避難場所も波に被られ、行っていたらダメだった。

警報が出たので、子どもたちを校庭に避難させ、全員いるか確認をした。当日は教頭、校長先生は出張でおられなかったが、校長先生は市内出張だったので、子どもたちを並べて、ワンパク山に避難するかとやっている間に、どうにかして戻ってこられた。その間に、親御さんたちが子どもを引き取りに来られたが、「警報が解除されるまで私たちとしましょう。」「万が一巻き込まれたら大変だから」「小学校が避難場所だから、家に戻るなんてとんでもない」ということで留まってもらった。先生一人と地域の人一人がワンパク山の少し高いところ、学校の屋上で一人、海の様子を見るためにいたのですが、「津波が来るぞー」と騒ぎ始めたので、全校児童がワンパク山の下まで動いた。(少しずつ前からワンパク山に近づいていた。そこで誰かが第二避難場所に行こうと言ったらアウトだったかな)

1年生から行かせますかと。道は細かったので一人ずつぐらいいしか行けなかった。

においがした。何のにおいと言ったらよいか。埃のにおいと言ったらいいのか、水煙の臭いがした。そして、なんであんな高さのところに黒い壁があるのかと思っていたら、津波だ。ワンパク山に子どもたち一人一人を行かせると間に合わないので、高学年をそこは道もない藪だったんだが、藪を踏み倒し登らせた。バキバキとして行った。そのあと低中学年を登らせた。低中学年を先に登らせると体が小さいのでスピードが落ちるので、そのあとに低中学年が続いた。

私が最後だったので、波は1mぐらいまで来ていた。何人かの人を引っ張り上げたが、だんだん波が上ってくるので、ダメだなあと思った。校庭に何十台車がとまっていて地域の人もいたんですが、ちょっと厳しい状況でした。登った人は助かった。第二避難場所に行った人も厳しい状況だった。

※ワンパク山 日頃から子どもたちが遊び慣れている学校の裏山で運動場に接している

この部分は、陸前高田市東日本大震災検証報告には、学校管理下にある児童が一人も犠牲者を出さずに済んだことは、教職員の臨機応変な対応や地域住民の助言などから、決められた避難所に留まらず、さらに高台に避難所をうつしたことが考えられるとある。

聞き取りの中で、チリ地震の時はこの辺は被害がなかった。来ても校庭が水につかるぐらいだろうと思っていた。考えが甘かった。とも話されている。さらに、第二避難場所ではなくワンパク山に避難した理由として、①波が目の前に見え、第二避難場所に行く時間がなかったこと、②あの場の判断は一択(ワンパク山)しかなかった、と述べられていた。

山に逃げることに意見の対立はなかったのかという質問には、揺れが尋常ではなくこれはまずいとみんなが思っていたので、対立はなかった。さらに、子どもたちが登り始めてから津波が来るまでの時間を30

秒から1分ぐらいと述べられている。こういう状況を聞くに及んで、行動と結果はいつも良い方向に向かうとは限らないが、この話の中に人の命を預かる者が状況を考え、判断し、行動する際の要点が5つある。以下にそれを記す。

- ①子どもを迎えに来た保護者を避難場所である気仙小学校に留まらせ子どもを引き渡さなかったこと。
- ②第二避難場所は危ないと判断し行かなかったこと。
- ③少しずつ避難位置をワンパク山に近づけていたこと。
- ④津波の見張りを置いていたこと
- ⑤ワンパク山に逃げるとき、体格のある高学年を先に登らせ、低中学年が少しでも登りやすくするために藪を踏み倒させていたこと。

①については1週間ほど前に津波警報が出たときには、子どもたちを親に返したことを「危なかったなあ」と回顧されている。この時は、「今までは何もなかった」という気持ちがあり、マニュアル通りの行動をされたと推察される。が、今回は今までとの違いを体で感じ「危険」を察知された行動であると思う。②は結果的には避難マニュアルを破ったことになるが、より高所へ逃げるのが安全と状況から選択の余地はないと瞬時に判断された結果であろう。③は先生方は地理的状况から、早くから第二避難場所よりワンパク山に逃げるのが安全という意味統一がされていたが、まさか校舎を飲み込む津波が来るとは思いもよらないため、すぐにワンパク山の直下で待機という行動に移せられなかったのだろう。しかし、最悪の事態を予想して子どもを移動させていたことがよい結果につながったと思う。④はより正確な情報収集するための行動であり、それを怠らなかつたことが良かったと思う。⑤は緊迫した状況の中でも、どうしたら全員避難することができるのかを考えた、取り得る最善の判断ではなかつたかと思う。これらは、教職員全員が「子どもを助けなければ、子どもの命だけは、何とかしなくては」という思いからのとっさの判断であったと思う。この思いが、後日に続く教職員の行動の原動力になっていったのではないかと考える。これらの事から、非常時にあつては正確な情報収集を行い、起こりうる事態を予想し、的確な判断をしてすぐ行動に移さなければならないことを示唆してものど考える。的確な判断とは、過去はどうであったとかの先入観を捨て、今の状況を直視して行動することである。

その後、先生は、

○登っていくと林道にぶつかるが、少しでも上に登らせたので、子どもたちが山中に広がり、全員を確認したのは1時間30分後ぐらいだった。

○消防車が1台登ってきて、林道下の熊谷さんという家に避難した。低学年は消防車に乗せてもらう。○情報が欲しくてラジオを聞くが全くない。入ってくる情報は、壊滅状態、連絡が取れない。それしかなかつた。

○熊谷さん宅から20分ぐらい歩いて、お寺と神社に低高学年に分かれて避難をした。

○音がない、光がないと恐ろしい。

○先生方は、子どもを何とかしなくては、子どもの命だけはという思いで動いていたのでパニックにならなかつた。

という話を続けられた。

下の(3-2・3-3)写真は被災時の気仙小学校である。写真からでも先生方や子どもたち、地域の人々が我々が想像すらできない状況下に置かれた避難行動であつたことがわかる。

(3枚の写真は関戸先生からいただいた)



被災前の気仙小学校 3-1



被災した気仙小学校 3-2



体育館が燃える上がる気仙小学校 3-3

また、いくつかの質問の中で、

- ① ああいうときは、何かしておかなければおかしくなる。この状況は何なのか、夢を見ているの、映画を見ているのか、わかんなくなっちゃう。
- ② 今回の地震津波を想定外で終わらせてはならない。イメージとしては理解しているが、なかなかできない。いつでも行動できるようにしておく。
- ③ 自分は大丈夫と思ったことが危ない。

ということを述べられた。①は、避難所の話の中で出てきた言葉だが、辛くても、今の事態をのり越えるために出来ることはしていこうと行動すると、徐々に現実を直視できるようになるのではないかと思った。また、「人間は役割があると動き出す。」「各自が率先して自分の出来ることをやり始める」とも話されている。②③は、先入観は捨てて考え、情報を集め、確認し、行動する、すなわち各種警報・避難勧告・避難指示が出たとき自分自身に避難スイッチ入れることが大切であると教えていると思う。

しかし、最後に「私たちが今グラツときても、あの時と比べれば大丈夫だという変な言い聞かせをする」とも述べられていた。

## ② 今必要としているボランティアは

聞き取り調査を行った中で

- ・ 避難所から仮設住宅、そして新居へと移っていく人もあるが、特に新居に移った子どもたちに落ち着きがなくなっている。話し相手がいらない、自分たちだけが出てきた。という感じがある。
- ・ 子どもたち(大人)も2度(元の場所・避難先)コミュニティが崩れている。元の住まいは育ってきたところ、避難先で親しく話をしてきた人、そこでの「よりどころ」「つながり」が新居に移ってなくなってしまっている。新居では「つながり」がまだないのではないかな。
- ・ 大人も話し相手がいる。

と述べられた。震災後の学校では、ボランティアと絵を描いたり、親が死んだこと、ペットが流されたりしたことを話し、自分自身の思いを出す(話す)ことにより気持ちの整理をしていたと伺った。7年という時間を経て、震災直後から人が、地域が必要としているものは変化してきていると思うが、変化していないのは「自分の気持ちを聞いてくれる人」、「日常的な会話をしてくれる人」なのではないだろうか。これが、これからのボランティア活動の中心になっていかなければならないと感じた。